

| | |
|---------|---|
| 氏名 | 松野 悟之 |
| 学位の種類 | 修士 (看護学) |
| 学位記番号 | 修士 第 180 号 |
| 学位授与年月日 | 平成26年9月17日 |
| 学位論文題目 | 体外フィードバック装置を用いた女性の骨盤底筋群の機能評価と尿失禁のリスク要因の検討 －PFMトレーナーにおける非侵襲的評価－ |

論文内容要旨

| | | | |
|--|--|--------------|------------------|
| ※整理番号 | 185 | (ふりがな) 氏名 | (まつのさとし) 松野悟之 |
| 修士論文題目 | 体外フィードバック装置を用いた女性の骨盤底筋群の機能評価と尿失禁のリスク要因の検討—PFM トレーナーにおける非侵襲的評価— | | |
| <p>【研究目的】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 体外フィードバック装置を用いて各年代の女性の骨盤底筋群の機能評価を調査すること 2. 体外フィードバック装置を用いての女性の骨盤底筋群の機能評価と尿失禁のリスク要因との関連を検討すること <p>【方法】</p> <p>対象者は20歳代から70歳代の女性とした。測定項目としてPFM トレーナーの最大筋力、収縮持続時間、ICIQ-SFによる尿失禁スコア、体重、体脂肪率、BMI、自記式質問紙調査票による年齢、身長、仕事の有無、仕事の内容、運動習慣の有無、骨盤底筋体操歴の有無、排便時の怒責の有無、閉経の有無、出産回数、経膈分娩回数、帝王切開回数、出生児体重とした。分析では、対象者を各年代ごと、あるいは尿失禁の有無に分けて、各測定項目を比較検討した。対象者の尿失禁に関連する要因を抽出するために各評価結果を独立変数とし尿失禁の有無を従属変数とした単変量回帰分析と多重ロジスティック回帰分析を行った。また、多重ロジスティック回帰分析から尿失禁の有無に影響すると判断された因子に関してはReceiver Operating Characteristic (以下、ROC) 曲線を作成した。ROC 曲線は、Area Under the Curve (以下、AUC) を算出した。</p> <p>【結果】</p> <p>2013年10月12日から2014年4月24日まで測定を実施した。研究の趣旨を理解し同意が得られ測定を行った対象者は173名であり、最終的に170名を分析対象とした。尿失禁の有無の2群の比較では年齢、体重、体脂肪率、BMI、出産回数、経膈分娩回数、最大筋力、収縮持続時間に有意差がみられた。多重ロジスティック回帰分析では、BMIと収縮持続時間が抽出され、オッズ比および95%信頼区間はBMIで1.114 (1.014~1.223)、収縮持続時間で0.840 (0.764~0.923) であった。BMIのAUCは0.643であった。収縮持続時間のAUCは0.770であった。</p> <p>【考察】</p> <p>PFM トレーナーの骨盤底筋群の機能評価の指標である最大筋力は抽出されず、収縮持続時間のみが抽出された要因として、骨盤底筋群の筋線維の組成比率と筋活動様式が影響していると考えられる。骨盤底筋群の筋線維の組成比率は遅筋線維が67~76%を占めることや安静時にも持続的な筋活動が認められていることが報告されている。これらの報告からも骨盤底筋群の解剖学的な特徴である筋線維の組成比率が遅筋線維の割合が多いため、持続的な筋活動を反映する収縮持続時間の方が尿失禁発症への影響度合いが最大筋力より高いと考える。したがって、骨盤底筋群が緊張性の筋活動を必要とする抗重力筋であるため、骨盤底筋群を強化する際には瞬発力の要素が強い最大筋力のみならず持久力の要素が強い収縮持続時間の強化を促すことが尿失禁の効果的なトレーニングにつながる可能性が示唆された。収縮持続時間のAUCは0.770であり中等度の判別能があると判断され、BMIより高い判別能を有していた。</p> <p>【総括】</p> <p>骨盤底筋群を強化する際には骨盤底筋群の解剖学的な特徴である筋線維の組成比率を考慮して、瞬発力の要素が強い最大筋力のみならず持久力の要素が強い収縮持続時間の強化を促すことが尿失禁の効果的なトレーニングにつながる可能性が示唆された。PFM トレーナーで測定した収縮持続時間は尿失禁に関する有効な評価指標となることが示唆された。</p> | | | |

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200字程度)
2. ※印の欄には記入しないこと。